

連載

社会教育施設について考える(WG 報告)

～第8回：ダイニッケアストロパーク天究館編～

高橋 進(ダイニッケアストロパーク天究館)、生涯学習施設支援 WG

社会教育施設について考える連載記事、今回はダイニッケアストロパーク天究館の高橋進さんに記事をお願いしました。熱心であった設置者(しかも、私企業)に支えられ運営されていた施設ですが、時代の変化の中で運営の危機に立たされました。運営者の努力・活動が実を結び見事復活された話を、少し前の事例とはなりましたが当事者の高橋さんに振り返っていただきました。

高橋さんはもうすぐご定年により退職で、その後もうまく引き継がれていくのか、少し不安な面も残されていますが、我われ現役の皆の活力となるお話をお寄せいただきました。

WG としても今後を見守っていきたくと思います。 福澄孝博 (WG 代表)

1. 天究館の成り立ち

ダイニッケアストロパーク天究館は滋賀県多賀町にある公開天文台です。この施設はダ

イニッケ株式会社の滋賀工場の敷地にあり、西村製作所製の60cm反射望遠鏡をはじめとして多数の望遠鏡が設置され、毎週土曜日に天体観望会が行われています(図1)。

ダイニッケ株式会社は書籍装丁用のクロスや壁紙などを作っている会社です。創業は1919年でまもなく100周年を迎えようとする会社です。天文学とは関係のない会社ですが、ダイニッケに天文台ができたのは当時の社長の坂部三次郎さんのおかげでした。

坂部さんは中学生の時に京都で部分日食を観察しました。八丈島で金環日食になった日食ですが、この日食の観察から天文の世界に魅せられたのでした。それから京都大学の山本一清先生に流星や変光星の観察を学び、每晚観測を続けたのでした。その後は東京物理学校(現在の東京理科大学)で惑星の軌道計算を学び、卒業後は京都の洛陽工業高校の物理学の教師になったのですが、日本クロス工業(現在のダイニッケ)の創業者の父の跡



図1 ダイニッケアストロパーク天究館

を継ぐことになりダイニックに入社し社長になったのでした。

社長になった坂部さんは京都にあった工場を滋賀県多賀町に移転します。そして滋賀工場ができておおよそ10年目になる1987年に企業の社会還元事業として天究館をオープンさせたのでした。

2. 天究館の実質閉館

天究館がオープンした1987年というバブルの絶頂期でもあり、多くの企業が収益の一部で文化やスポーツ・芸術などの支援を行っていました。メセナ活動（企業による文化支援の活動）とかフィランソフィー活動（企業による社会還元活動）といった言葉がよく聞かれました。そうした中で天究館はダイニック株式会社のメセナ活動として位置づけられていきました。天文台として毎週土曜日の定例観望会、そして昼間の太陽観察会、平日の夜の団体向け観望会以外に、年間おおよそ10回のクラシックのコンサートや特別展示として主に自然を対象とした写真展なども行っていきました。

ところが、そうした時代は長くは続きませんでした。やがてバブルは崩壊し、多くの企業が赤字に転落しました。ダイニックも厳しい状況が続きました。利益の出ている会社が文化支援をすることに意味はあるのか、ほうぼうからそうした声が聞こえてきました。ダイニックも例外ではありませんでした。そうした中で2003年に本社より実質閉館の指示が来ました。

しかし毎週の土曜日には星を見に大勢の人たちが来られます。何とかして事業を続けていきたいと思い、多賀町に事業継続に手を貸してほしいと頼みました。そして観望会やコンサートなどの事業は多賀町教育委員会の名義でおこなう。職員は基本的に全員が工場に籍を移すが、館長として1名は施設の維持管

理にあたり、活動の主体はボランティアの人たちの応援でおこなう。ダイニックは施設の維持管理を行っていくという、行政とボランティアと企業の連携という図式が作られました。こうして実質閉館と言いつつ活動の継続が認められたのでした。

3. 環境天文台

とりあえず閉館は避けられましたが、天究館が今後も活動を続けるにはまだまだ工夫が必要でした。そんなある夜の天体観望会の時に参加された方から「天文学って社会の役に立つんですか？」と質問されました。それに対して「もちろんです、ニュートン物理学だって相対性理論だって天文学があるからこそ生まれてきたようなものです。天文学は現代科学の原点のようなものなのですよ」と答えたあと、こう続けました。「星空を見上げると無数の星が見えます。そうした恒星の周りをもしかすると惑星が回っているかもしれません。でもいまだに地球ほどすばらしい星は見つかっていません。私たちは宇宙を知ることから、地球のすばらしさをあらためて知ることができるんです。」

その時はとっさに言った言葉でしたが、それから天文学を通して環境教育を進めていこうと思うようになりました。宇宙の話をしながら地球のすばらしさを伝えていくようになりました。以前に撮影した天究館での星野写真と最近撮影したものとを比べて星空の変化を話していくようになりました。こうした活動に対して2005年には環境省水大気環境局から環境保全功労賞をいただくことになりました。

さらに多賀町から委託を受けて小中学生を対象にした多賀町アストロクラブを運営していますが、このクラブを環境省のエコクラブに登録して天体観察もですが自然観察や道路清掃活動なども積極的に行うようになりまし



図2 第23回星空の街あおぞらの街全国大会

た。滋賀県でのエコクラブの発表会では大賞は取れなかったものの、ほぼ毎年県知事奨励賞を受賞し、その存在をアピールするようになりました。そうした中で環境省より「星空の街・あおぞらの街」全国大会を2011年に天究館がある多賀町で開催しようという話が来ました(図2)。中学校の体育館で全国大会を開いた後に高円宮妃殿下にもおいでいただいて天究館で観望会を行うということになりました。宮様が来られるということで会社をあげて対応することになり、実質閉館の話もなくなり、ふたたび会社の施設として天文台活動を行えるようになりました。

4. 復興支援と天文台活動

全国大会のあった2011年は東日本大震災が起きた年でもありました。震災では多くの天文台やプラネタリウム館でも被害がありま

した。震災のすぐ後のアストロクラブで子どもたちに、被災したところでは星を見るところではないそうだよと話をしました。その時に子どもたちから被害を受けた人たちに応援の壁新聞を送ろうという声が上がりました。これまでエコクラブの発表会などでアストロクラブの活動を紹介する壁新聞を模造紙に書いてきました。今度は被災した人たちに応援のメッセージを書いた壁新聞を作って送ろうというのです。さっそくみんなで書き上げて、その年の6月には宮城・福島・茨城の天文台やプラネタリウムで被害を受けた4館に壁新聞を送りました。これに対してお礼の手紙や寄せ書きなども送ってもらい、そこから交流が始まりました。壁新聞は毎年3月初めに、さらに6月下旬にはメッセージ短冊満載の七夕飾り、12月の終わりにはこれもメッセージ満載の模造紙大の巨大年賀状を送るようになりました(図3)。

2013年の夏休みに福島県富岡町の親子100人が彦根市に2泊3日で遊びに来られることになりました。富岡町は福島第一原子力発電所から10kmほどのところにあり、避難指示で今も全員が町外に避難している町です。ばらばらに避難している人たちが一緒に旅行をしようという企画です。彦根市から天究館に天体観望会をしてほしいとの依頼がきました。そこで天究館に集まっているボランティアの人たちと共にアストロクラブの子どもたちにも望遠鏡を持たせて観望会を実施しました。美しい星空の下でアストロクラブの子どもたちと富岡町の子どもの子どもたちと楽しく月や星を観察することができ、一週間後に富岡町の皆さんからお礼の寄せ書きが届きました。それに応えてアストロクラブから応援の壁新聞を送りました。こうしてアストロクラブと富岡町との交流が始まりました。ただ富岡町の人たちは避難が長期化していくなかで、避難指示が解除されてもみんなが富岡町に戻っ



図3 多賀町アストロクラブによる復興支援巨大年賀状

てこられるかという心配があります。そこで天文館で発見した小惑星に「Tomio kamachi」という名前を付けることで富岡町に愛着を持ってもらい、少しでも多くの人が富岡町に戻ってもらおうということになりました。この命名は多くのマスコミにも取り上げられました。そしてこうした活動についても会社から多少なりとも評価をもらえているようにも感じています。

5. 天文台の必要意義

天文学って役にたつの？という問いから始まった話ですが、あらためて私たちは「天文台って必要あるの？」という問いかけを自分自身にしなくてははいけないかと思えます。環境天文台も復興支援の活動も本当にそれが社会にとって意義のあることなのか常に考えながら進んでいかないとはいけません。天文台でものすごく儲かるという話も難しいでしょう

し、天文台がないと本当に困るという人も少ないかもしれません。でもこの天文台があつてよかったと言ってもらえるように努力をこれからも続けなくてははいけません。そしてみんなで知恵を出し合いながらそんな天文台を目指していくことも大切かもしれません。

この天文台があつてよかったと言ってもらえるよう、みんなの力で頑張っていきましょう。



高橋 進